

1996年に「形態用語の使い方・使われ方」という用語集が増刊号として出版され<sup>1)</sup>、その後の補訂を経て2002年に「胃と腸用語事典」(医学書院)が出版された<sup>2)</sup>。その序文に同書の趣旨をみることができる。すなわち、早期胃癌研究会での討論で問題になる用語を挙げ、用語の使われ方に統一をもたせることを目的としたとされている。基本的姿勢として、言語や用語の当初の用いられ方を重要視し、用語の基本的な意味を振り返ることも同書の意義とされている。具体的な用語集の作成過程は、以下のとおり説明されている。「胃と腸」誌27巻(1992年)から29巻(1994年)の2年3か月間にかけて「用語の使い方」欄を設けて用語解説を連載した。同書はそれを充実させ、基本用語を図説し、系統的に解説することをねらった。

現在では当初の用語解説の連載開始からみて約20年が、用語事典出版からみて約10年が経過したことになる。その後の消化器診断学の推移をみると、大きな変化があることは間違いない。本特集号では、前回と同様の姿勢で企画に臨むが、近年多用される用語を取り上げることになる。もちろん、最近の「胃と腸」誌に使われた基本的な用語はもれなく取り上げるつもりである。あえて、多くの用語から厳選した213項目を取り上げて、用語の基本と意見とを組み合わせた内容とした。この項目数は、1996年の増刊号の項目数147と比較して、かなり増加している。しかも、項目内容を比べると、前回採用され、今回採用とならなかった項目数は94であり、今回採用された新規項目数は165に及ぶ(48項目が共通した項目数)。この理由は、基本的に前回の内容で記述に変化がないものや、歴史的な経緯が判明し前回に詳述されているものは、今回は割愛した。その中にはX線検査に関する用語が多かった。振り返ると、その用語は現在あまり使用頻度が高くないものがあるが、ある程度診断学の現状を反映して

いる。

今回取り上げた項目には、内視鏡診断と内視鏡治療に関する用語が多くなった。その領域では、まだ用語の用いられ方が定まっていないものもあるかもしれない。しかし、例えば拡大内視鏡に関する用語は早期胃癌研究会や関連する学会などで頻繁に用いられるものがある。基本概念が変遷しつつある用語もある。病理学的分類や用語にも大きな変化がある。その用語の採否はかなり吟味したつもりである。なかには学問的には完全に解明されてないものもあるかもしれないが、現在の見解として権威ある方に解説していただいた。用語の概念に多少の混乱があっても複数の意見として取り上げ、「胃と腸」誌の問題点重視の姿勢を表したいとの思いがある。

以上が今回の用語集に臨む編集委員会の基本姿勢である。執筆内容は、前回と同様に形態学用語であるから、シェーマや画像を活用してわかりやすく記載していただいた。1996年の増刊号では、出版後も多くの意見をいただき、編集者にとって大変参考になったと聞いている<sup>3)</sup>。当時、編集委員長として先頭に立って企画を進められた多田正大先生は、ご自分にとって最も記憶に残る一冊であったとして、当時の各執筆者と編集者の奮闘ぶりについて最近の座談会で述べておられる。本号にも、ぜひ読者の皆様に読後のご批判をいただきたいと考える所存である。もちろん、本号が読者の身近にあって、用語の用いられ方、どういう意味合いがあるのかについて頻繁に引用していただければ、編集者と執筆者にとって最大の喜びである。

## 文 献

- 1) 特集 図説 形態用語の使い方・使われ方。胃と腸 31: 259-438, 1996
- 2) 胃と腸用語事典。八尾恒良(監)、牛尾恭輔、池田靖洋、他(編)。医学書院, 2002
- 3) 松井敏幸、八尾恒良、多田正大、他。座談会 「胃と腸」創刊号からの電子ジャーナル化を迎えて―歴代編集委員長の“私の一冊”。胃と腸 47: 113-128, 2012

1) 福岡大学筑紫病院消化器内科  
(☎ 818-8502 筑紫野市俗明院 1 丁目 1-1)  
E-mail: matsui@fukuoka-u.ac.jp